



つくりかたの共有

佐藤成行

「つくりかたの共有」は互いのつくりかたを知る会。研究員の佐藤（成）と朝比奈が企画。研究所メンバーの話を聞く場をつくる。計三回実施。

つくりかた研究所一年目後半、全三回の「つくりかたの共有」という会を実施した。これは研究所のメンバーのつくりかたを知るために、若手研究員の佐藤（成）と朝比奈が勝手に企画をしたものだ。実施できた回数は少ないし、つくりかたを共有したかった人は他にもいるものの、互いのことをあまり知らないでつくりかた研究所というプロジェクトがスタートしたので、手の内を知ることが重要なことだと考えていた。本稿は、「つくりかたの共有」に至るまでの記録である。

二〇一三年十月 | HESRAY

若手研究員がバスの上演に向けた企画を持ってきてプレゼンをする、つくりかた研究所全体のミーティングが行われた。この日、東京アートポイント計画の森司さんも来ていたため、ベテランも緊張し、着地点を見失っていたのだと思う。この日、若手の持ってきた

企画に対して、ベテランがいわゆる「上から物を言う」ミーティングになってしまった。そもそも事前に「一人ひとつは企画を持つてくること」という連絡が回ってきており、それはのちの研究所からはかけ離れた態度だった。空気はとても悪くなり、自分なりにそれをどうにか打破しなかった。この日のことに関しては僕も朝比奈も少し腹が立っていた、というのが「つくりかたの共有」の最初の推進力になっていたと思う。

二〇一三年一〇月八日 6:22

朝比奈にメールを送る。前に会ったときに「今度飲みましょう」なんてやりとりをして別れたものの、僕自身お酒や飲み席が得意でないので「お茶でもしませんか」と誘った。つくりかた研究所には開室日という漠然とした集まりがある。もともとは研究所が始まったころ、ベテランと若手研究員たちになしに訪れて雑談ができるように、秋葉原にあるアーツ千代田3331の一部屋を借り、月に数回、長島と研究員の東（当時はスタッフとして参加）が常駐した状態で開いていたものだ。居心地のよい空間だが、環境を変えてみたい、朝比奈と別のところで会うことにした。

二〇一三年一〇月四日 6:22

朝比奈と、昼時の東京大学本郷キャンパスを軽く散歩して、構内の屋台でタイカレーを買いラウンジで食べながら、おしゃべりをした。

一緒に企画を進めていく上で、互いの手の内（考えかたとか、作品のつくりかたとか）を知らないというのはどうなんだろう、知らなくても企画は立てられるけれど、知ることと生まれてくる企画とかもありえるだろう、というような話をした。また、共通の文脈があることは組織において便利だろうとも思っていた。共有された知識や体験などがあればやりとりはスムーズになるし、それによってより一歩踏み込んだ話ができるだろうとも考えていた。そうして「つくりかたの共有」のアイデアが出てきた。

当時、他の研究員のことは全然知らなかったが、僕は研究員の久保とバスリサーチのチームと一緒に、台東区のコミュニティバスをリサーチしたときに、彼女のダンスのつくりかたについて聞く機会があった。高校の創作ダンス部での創作過程の話。「つくりかたの共有」で話したらおもしろそうだと感じ、久保に打診してみる。

二〇一三年一〇月二九日のこと

朝比奈にメールを書いた。久保に会って聞いたこと。久保のつくりかたは、演出家のトツプダウンでつくらない。みんなで意見を出し、延々と話し合う。大学でも新しい仲間と同



じ方法でつくっているという。演出、照明、衣装など担当はあってもそれを越えてフラットに意見を出し合える環境。

そして、以上のようなつくりかたに関心・関係がある人、もしかしたら対極にあるかもしれない人がこの会に同席したらいいと考えた。例えばベテラン梶の中野（演出家）や、研究員のオノマ（劇作家）など。もう少しプランが固まってきたら、サイボウズ（つくrikat研究所内で使われているSNS）とかにも投げてみようかと思った。

二〇一三年二月十八日（金）

つくrikat研究所のメンバーリングリストに案内のメールを送る。件名は「（つくrikatのつくrikat） n乗のお誘い」。実際に送ったメールのサマリーは以下のようなものだ。

様々なバックグラウンドをもつ方々が集まっているわたし達は、まだまだお互いのことを知りません（と思ってます）。

もしかしたらお互いの思考、知識、技能を共有できたら、もっとできること、やってみたい企画が見えてくるかもしれません。

と、同時にそうした「つくrikat」の共有方法も探していけたらいいな、と。

ワークショップやプレゼン、報告書だけじゃなく、もっと有機的な方法が見つかったらいろいろな人やモノにつながれるんじゃないでしょうか。

この会は、その人の作品の創作方法（つくrikat）をどうやって発見したか、あるいはどうやってつくったのか（つくrikatのつくrikat）を知るものだ。そして同時に、参加している人のつくrikatも共有され、それが参加者の分だけ明らかになれば。そのような意味で「（つくrikatのつくrikat） n乗」というサブタイトルをつけた。

それから開催までのこと

メンバーリングリストを送ってからの一か月弱は、会の形式をより細かく詰めていった。この会を一方的に久保が話す、というようなものにするつもりはなかった。一〇月一日の全体ミーティングがトラウマになりかけていたし、トップダウンではないつくrikatについて話を聞く予定だったので、参加者でおしゃべりするようにできるといいと思った。漠然とした集まりである開室日に近いと思う。開室日に話題だけ与えるようなかたちにしたいいと思っていた。

また一人のつくrikatを参考にして他の人のつくrikatも相対的に見えてきたらいいと

思っていた。そういう意味で久保を「重要参考人」と呼んでいた（朝比奈の議事録によると、「参考文献」とか「参考資料」とも呼んでいる）。参考人という立ち位置に配置することで、参加者それぞれのつくりかたの違いや共通点を浮き上がらせたかった。なにが違うのか、なにが一緒なのか。つくりかた研究所は演劇やダンスなどの舞台芸術関係の人が多いが、当たり前だと思ってしまうわざわざ話したりしないことも、この場では改めて話をする必要があるだろう。

二〇一三年二月九日のこと

「つくりかたの共有」の実施当日。最初にざっくりと久保の話聞き、会の半分以上の時間はおしゃべりのような感じだった。途中抜けや途中参加の人もいて、七人前後の人がつねにいたが、会話が分かれてしまうことはなかった。嫌な緊張感はないが、改まって話すことの緊張感はあるって、これはかえってよかったと思う。

二〇一四年二月九日のこと

二回目の実施。研究所のグラフィックデザインを担当しているデザイナーの福岡さんを重要参考人に呼んだ。同日は研究所内の報告会もあり、その前の時間に行った。そのため

時間的な焦燥感に駆られたかもしれない。

デザイナーはクライアントが言うままをあたりに起こす仕事（ラフ画をもらってそれを清書するような）をする人だと僕は思い込んでいたけれど、福岡さんはコンセプトを受け取ってそこから何案も出していく。何よりも興味を湧かせたのは、福岡さんと長島のデザイン決定のやりとりが、犯人と探偵みたいな推理合戦だったこと。お互いに相手がなにを考えてデザインしているか、いかにデザインの意味を読み取るか、ということをくりかえして仕事をしているようだった。長島からその話を聞いてずっと気になっていた。

長島との過去の仕事や研究所の名刺のデザインのパターンなどを持ち込んでもらって、これまでの話を聞くことができた。みんなでおしゃべりというよりは、ややインタビュールのような形式になったことを記憶している。

二〇一四年三月二十八日のこと

三回目の実施。研究員の深海（人類学者）を重要参考人に呼んだ。人類学の研究方法に関する話ではなく、研究対象の話をするというのは、「つくりかた」そのものとは違うが、深海の話したいという強い要望があったことと、また深海の研究対象であるポリアモリー（誠実な複数愛）について話すことを通じて、何かの「つくりかた」に触れられると思った。

初めに深海からポリアモリーについてのプレゼンテーション（大学の授業に呼ばれることもあるらしくよく準備されていた）を聞き、それからは参加者で、それぞれの恋愛体験も交えてしゃべる時間も設けられた。

その後のこと

時間が経つにつれて「つくりかたの共有」のようなお膳立てがなくても、互いにいろいろなことを聞いたり話したりできる環境・関係性ができてきた。そのため「つくりかたの共有」が、手間の割に効果が弱いと感じられるようになり、以降は「つくりかたの共有」は実施しなかった。ただ、他にもっとつくりかたを共有したかった人（若手研究員の中村、鈴木（平）、初年度経理担当の戸田など）もいる。

二〇一六年二月の状況

最初の「つくりかたの共有」を終えてから、二年以上の歳月が経って振り返ってみても、「この会の効果ってよくわからない」と思っている。ただ、答えが出しづらいものの、効果が見えにくいものがつくりかたの研究所には山ほどあり、久保のつくりかた（とことん話し合う）のような状況は、その後何度か出くわすことになった。もしかしたらそういう話し

合いに向けての事前講習会みたいな効果はあったかもしれないし、それほどじゃないかもしれない。

でも、もっと一方的な共有もありえるし、おしゃべりのなかではうまく伝えられない人（福岡さんの共有がインタビュウのようになったことはかえっていろいろ聞けたようにも思う）、自分で語らずに人に語ってもらう方がおもしろい人もいるんじゃないだろうか。あるいは口頭ではないコミュニケーション手段もありえると思う。例えば、研究員の経歴とか履歴をまとめてみる。どんな演劇が好きで、どんな本や演出家に影響を受けているのか。そこからその人のつくりかたが見えてくるのではないか、ということも考えていた。研究員のリサーチというか、報告書のようなかたちで共有されるようなものもあろうんじゃないだろうか。実施したかった中村、鈴木（平）、戸田はこういった方法でやってみたと考えていた。

二〇一四年度（二年目）から次第に研究室体制（研究員同士が集まった小さなプロジェクト）ができてきた。それは「つくりかたの共有」の想定する目標のひとつだったが、研究室体制に移ったのは、開室日の存在とそこでおしゃべりとそこで培われた研究員同士の関係性の賜物だと思う。でも、もしかしたら「つくりかたの共有」もその一端を担ったのかもしれない。